信濃の国に（格助）更級と（格助）いふ所に（格助）、男住み（四段・用）けり。（過去「けり」終）

若きときに（格助）親死に（ナ変・用）ければ（接助）、をば（係助）なむ（係助）親の（格助）

ごとくに、若くより（格助）あひ添ひて（四段・用 接助）ある（ラ変・体）に（接助）、この（格助）妻（しうとめ）（め）

の（格助）心憂きこと多くて（接助）、この姑（しうとめ）の（格助）、老いかがまり（四段・用）

てぬたるを（接助 存続「たり」体 上一・用 格助）常に（副詞）憎み（四段・用）つつ（接助）、男に（格助）も（係助）この（格助）をば

の（格助）御心（みこころ）の（格助）、さがなくあしきことを（格助）言ひ聞かせ（下二・用）

ければ（過去「けり」已 格助）、昔のごとくにも（比況「ごとくなり」用 係助）あらず（ラ変・未）、おろかなる（形動・ナリ活用・体）

こと多く、このをばのために（格助）なりゆき（四段・用）けり。（過去「けり」終）

これをなほ、この嫁、所狭がりて、今まで死な（ナ変・未）

ぬことと思ひて、よからぬことを言ひつつ、

「持ていまして、深き山に捨てよ。」

と（格助）のみ責めければ、責められわびて、さし

てむ（意思「む」終）と思ひなりぬ。

月のいと明かき夜、「嫗ども、いざ給へ。寺に

尊きわざすなる、見せ奉らむ。」と言ひければ、

限りなく喜びて負はれにけり。高き山のふもと

に住みければ、その山にはるばると入りて、

高き山の峰の、下り来べくもあらぬに置き

て逃げて来ぬ。

信濃の国の更級という所に、男が住んでいた。

若い時に親が死んだので、伯母が親のように、

若い時から付き添っていたが、男の妻の

心は不快なこと（嫌なところ）が多くて、この姑が、

年老いて腰が曲がって

いるのをいつも憎みながら、男にもこの伯母

の心が意地が悪くて悪いことを言い聞かせ

たので、（男も）昔のようではなく（昔のように

伯母を大切に思うようなことがなく）、おろそかな

ことが、この伯母に対して多くなった。（伯母に対

しおろそかに扱うことが多くなった。）

この伯母は、たいそうひどく年老いて、腰が折れ

曲がっていた。

これをやはり、この嫁は窮屈で厄介に思い、（よく）

今まで

死ななかったことだと思って、（男に伯母の）良く

ないことを言いながら、

「（伯母を）連れていらっしゃって、深い山奥にお捨

てになってください。」

とばかり責め立てたので、（男は）責められて困って

、

そうしようと思うようになった。

月がたいそう明るい夜、（男は）「おばあさんよ、

さあいらっしゃい。寺で

ありがたい法会をするということです、（それを）

お見せ申し上げよう。」と言ったところ、

（伯母は）この上なく喜んで、（男に）背負われた。

高い山のふもと

に住んでいたので、その山にはるか遠くまで入っ

ていって、

高い山の峰の、下りて来ることもできそうにない

所に（男は伯母を）置いて

逃げて来た。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/